

国里愛彦 (2014).  
介入研究の質のアセスメント：GRADEシステム  
日本認知・行動療法学会第40回大会，富山国際会議場.

国里 愛彦

臨床心理学には，アートの側面とサイエンスの側面がある。エビデンスに基づいた実践が求められる現代においては，心理療法の治療効果を検討する無作為化比較対照試験が多く行われている。ここでは，臨床心理学におけるサイエンスの側面が強調されているといえる。エビデンスに基づいた実践は，以下のステップで進む。(1) PICOなどを用いてクライアントの問題を定式化する，(2) クライアントの問題について電子データベースなどをもちいて情報収集する，(3) 得られた情報を批判的吟味する，(4) 得られた情報を目の前のクライアントに適用する，(5) これまでの実践を評価する。エビデンスに基づいた実践という時に，(1)～(3)の部分が強調されることが多いが，(4)～(5)のステップも重要であり，この部分では臨床心理学のアートの側面が重要となる。

エビデンスに基づいた実践において，ステップ(3)得られた情報の批判的吟味は，核となる部分になる。しかし，批判的吟味を実施する上で，参照枠となるものがないと，個々の実践家・研究者によって判断が異なってしまう可能性がある。そのため，2000年に発足したGRADE Working Groupによって，各論文の質の評価と推奨度を定めるための明確かつ透明性の高い基準としてGRADE (Grading of Recommendations Assessment, Development, and Evaluation) を作成する試みが行われてきた。GRADEに関する情報は，ワーキンググループのサイト (<http://www.gradeworkinggroup.org/>) やGuyatt, Oxman, Akl, Kunz, Vist, Brozek, Norris, Falck-Ytter, Glasziou, deBeer, Jaeschke, Rind, Meerpohl, Dahm, & Schünemann. (2011) の論文をはじめとするJournal of Clinical Epidemiology誌での特集，日本語書籍としては，相原守夫・三原華子・村山隆之・相原智之・福田眞作・GRADEワーキンググループ (2010) による『診療ガイドラインのためのGRADEシステム』がある。

日本認知・行動療法学会第40回大会シンポジウム「失敗しない研究計画入門：研究の質を評価するための国際基準の理解」では，介入研究，特に無作為化比較試験の論文を読む際の批判的吟味方法について，GRADEシステムに基づいた発表を行った。エビデンスの質の評価では，研究の限界，不正確さ，非一貫性，アウトカムの非直接性，出版バイアスを評価する。そして，研究の限界では，割り付けの隠蔽，盲検化，患者やアウトカムイベントの不完全な検討，選択的アウトカム報告などを評価することについて説明した。

日々の実践で忙しい臨床家だからこそ，GRADEによって効率的に批判的吟味を行い，その結

果を日々の実践に活かす事が求められると考えられる。さらに、研究者においても、現状では米国心理学会や英国のNational Institute for Health and Care Excellenceなどのガイドラインを参照することが多いが、今後は日本の医療や健康領域の現状をふまえた上で、臨床心理学的介入やアセスメントに関してもGRADEシステムを用いたガイドラインを作成していくことが求められる。本発表のスコープからはそれるが、それらも今後の課題といえる。

## 引用文献

- 相原守夫・三原華子・村山隆之・相原智之・福田眞作・GRADEワーキンググループ (2010). 診療ガイドラインのためのGRADEシステム—治療介入— 凸版メディア
- Guyatt, G., Oxman, A. D., Akl, E. A., Kunz, R., Vist, G., Brozek, J., Norris, S., Falck-Ytter, Y., Glasziou, P., deBeer, H., Jaeschke, R., Rind, D., Meerpohl, J., Dahm, P., & Schünemann, H. J. (2011). GRADE guidelines: 1. Introduction-GRADE evidence profiles and summary of findings tables. *Journal of Clinical Epidemiology*, **64**(4), 383-394.